2　平将門に関する伝説(2)

五十代桓武天皇の四代目高望王が臣籍に降って平家を称え、その三男鎮守府将軍平良将の第三子が将門である。将門には多くの子供があったが、そのうち第三姫は大変美しく求婚者も多かったが、これをゆるさず、のち仏門に入って如蔵尼といった。天慶の乱後、「一族は離散し、あるいは僧となり、あるいは世を忍んで深山に潜む」状態であった。姫は名を滝夜叉と替え、弟の将軍太郎良門と相馬まで落ちのびた。父の復讐を図った彼女は、有髪の尼で、その黒髪を宝冠布に包み、手に宝珠と「延命地蔵経」一巻を携え、錫杖をついて村里を歩き、地蔵菩薩の十種の功徳を説いて廻ったが、錫杖の中には生身の刀が仕込まれており、その伝道活動は同志を集める手段であったという。姫が「勝軍地蔵の妖術を用いて民を惑わす」という理由で、朝廷は源頼信に命じて討伐に向かわせたが、姫は白馬に乗って相馬牧の原の馬の群れの中に消えたといわれる。



中生保内神社に祀られている延命地蔵

口碑（言伝え）によれば、姫はその後、近臣に護られて生保内まで落ちのび、中生保内に草庵を結んでこの地を開拓し、奉持してきた延命地蔵尊を祀り、多くの伝説を後世に残し、一族は繁栄して生保内の村祖になったという。いまに残る地蔵長嶺、地蔵野地、卵塔野などの地名は、ありし日の歴史を物語るものといわれる。

現在中生保内堂の前、町道生保内中央線から西方約五〇メートルの箇所に、滝夜叉姫を葬ったといわれる長さ一五間、幅五間、高さ一丈ほどの古塚があり、またそこから約一キロ手前の中生保内神社には、姫がこの地を訪れた際持ってきたといわれる、延命地蔵尊の木彫像が現存している。

ちなみに明治三年（一八七〇）九月十九日、平民一般の苗字が許された際、生保内村では滝夜叉姫の一族といわれる人々は申合せにより田口姓を名のったため田口姓が多いといわれる。